

茨城県行方郡玉造町

井上古墳群第1号墳
発掘調査報告書

2002年 2月

玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

序

玉造町は、茨城県の南東部に位置し、霞ヶ浦を臨む、温暖な気候と豊かな自然の環境に恵まれ、私たちの郷土は古くより人々の生活の場となり、そこには幾多の歴史が残されています。現在でもその人々の生活の痕跡として、貝塚や古墳・城館跡等の遺跡が町内に数多く点在しております。

しかしながら、これらの貴重な遺産である埋蔵文化財も、近年の開発によってその保護・保存は非常に困難となってきております。

井上地方においては、昭和59年度に町道124号線の拡幅工事に伴う井上古墳群第4号墳、平成6年度に県道山田・玉造線歩道新設工事に伴う井上廃寺跡発掘調査や、町道369号線の拡幅工事に伴う井上貝塚発掘調査がおこなわれております。

さて、井上古墳群第1号墳は、築造時の約1／3が残存しているにすぎず、この度、宅地拡張造成及び土砂崩れの危険回避のため発掘調査を実施しました。

この古墳は從来前方後円墳と考えられていましたが、今回の調査の結果、直径30mの円墳であることが確認されました。また、古墳の下部より弥生時代の住居跡が確認されるなど大きな成果が得られ、本報告書にまとめ上げられましたことに感謝申し上げます。

本報告書に際しまして、発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました鹿行文化研究所、汀安衛先生には心より敬意を表し、この報告書が郷土をより深く知る上で、広く一般の方々にもご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、地主の田中治氏をはじめ地元の関係各位の深いご理解とご協力を賜りましたことに厚く感謝を申し上げご挨拶といたします。

平成14年2月

玉造町遺跡調査会

玉造町教育委員会教育長

大崎博之

例　言

- 1 本書は、茨城県行方郡玉造町井上2053番地一1ほかに所在する井上古墳群第1号墳発掘調査報告書である。
 - 2 本古墳は個人の宅地内に一部位置している。幅長の宅地の為、家屋の建て替え予定地に古墳が所在、拡幅に困難をきたし教育委員会と協議の結果、残存する古墳を調査し予定面積を確保する事となった。
 - 3 本古墳はすでに以前の宅地造成時に南、東側の大半が削平を受け残存する部分はおよそ全体の約1／3程であった。
 - 4 本調査は鹿行文化研究所の汀 安衛が担当し、調査員に西田和子があつた。
- 調査は平成13年7月24から8月7日までの12日間である。

5 調査会組織

会長	大崎 博之	(玉造町教育委員会教育長)
副会長	風間 亨夫	(玉造町文化財保護審議会長)
理事	宮崎 幸男	(玉造町文化財保護審議会副会長)
	鈴木 亮然	(玉造町文化財保護審議会委員)
	八木 操	(玉造町文化財保護審議会委員)
	笛目 吉久	(玉造町文化財保護審議会委員)
	小沼 政雄	(玉造町文化財保護審議会委員)
	堀田 好男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	汀 安衛	(鹿行文化研究所長、調査主任)
	田中 治	(地元協力者)
監事	田山 信男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	大場 浩一	(玉造町文化財保護審議会委員)
事務局	重田 順爾	(玉造町教育委員会生涯学習課長)
	中田 美代子	(玉造町教育委員会生涯学習課係長)
	森作 保繁	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育主事)
	森作 知代	(玉造町教育委員会生涯学習課主事)

- 6 本調査に際し、多くの方々の協力を受けた。記して感謝の意を表したい。
茨城県教育庁文化課、玉造町教育委員会、玉造町中央公民館、玉造町文化財顕彰会、高埜栄治、
調査協力者 横田泰隆、徳利初代、人見 明、生駒誠二、田中美鈴、行方地方広域シルバーパートナーセンター、田中久蔵、西谷正明、飯島義伸、兼平工務店
- 7 田中治氏には、調査費用、樹木の伐採、水道、休憩場所、茶菓、便所等にご協力を受けた事を記して感謝の意を表したい。

凡 例

- 1 本書は井上古墳群1号墳残存部分の発掘調査報告書である。
- 1 調査まで1号墳は前方後円墳とされていたが推定径30m程の大型の円墳であることが判明した。家屋建屋のため全面調査は不可能であった。確認出来る範囲では直径30mの大型の円墳が想定された。よって、円墳とした。

目 次

序文	-----	1
例言	-----	2
凡例	-----	3
目次	-----	3
挿図目次	-----	4
写真図版目次	-----	4
第1節 井上古墳群の概要	-----	5
第2節 調査に至る経過	-----	6
1 調査日誌	-----	6
第3節 調査の概要	-----	8
1 測量調査	-----	8
2 トレンチ層序	-----	9
3 周堀	-----	11
第4節 墳丘下の遺構	-----	13
第1号住居跡	-----	14
第2号住居跡	-----	15
第3号住居跡	-----	16
第4号住居跡	-----	16
第5節 総括	-----	19
第6節 考察	-----	21
抄録	-----	26

挿 図 目 次

- 第 1 図 古墳群の位置と地形
- 第 2 図 1号墳測量図
- 第 3 図 1, 2, 3トレンチ周堀位置図
- 第 4 図 封土土層図
- 第 5 図 1, 2トレンチ出土遺物実測図
- 第 6 図 1, 4区周堀土層図
- 第 7 図 1, 4区周堀出土遺物実測図
- 第 8 図 古墳、住居跡位置図
- 第 9 図 第1, 2号住居跡実測図
- 第 10 図 第1, 2, 3号住居跡出土遺物実測図
- 第 11 図 第3, 4号住居跡実測図
- 第 12 図 表採遺物実測図
- 第 13 図 岡部古墳群第1号墳測量図

写 真 版 目 次

- P I - 1 上左右 調査前状態、中左右 トレンチと土層、中下左右 トレンチと土層下左右前方部とされていた部分の盛土、下部に木根が見える。
- P L - 2 上左右 周堀土層と遺物の列、中左右北西側のテラス状に近い周堀
中左 西側からみる周堀、右 東側からの全景、下左右 北側の周堀テラス
- P L - 3 上左 北側のテラス部分、右 西側からの全景、中上左1号住居跡、右遺物
中下左 1, 2号住居跡、 中下右 3, 4号住居跡
下段 1, 2, 3号住居跡出土土器
- P L - 4 トレンチ出土遺物、土器、水鳥形土器、円筒埴輪、炉支脚

第1節 井上古墳群の位置と概要

井上古墳群4号墳は昭和59年発掘された。報告書の『概要と現況』の一部を引用すると「古墳群を載せる舌状台地はブーツ状を呈し、500m四方の約半分である。二等辺三角形相当部分に古墳は分布している。面積は約1,225,000m²に及ぶ古墳群エリアである。中略、古墳群は円墳4基、前方後円墳1基から構成されていたが、今回の調査にあたり古墳群の分布調査をしたところ、新たに2基の古墳が発見されたので古墳群の分布図を作成して訂正した。」とあり分布図、古墳の概要が報告されている。(第1図)

古墳群は、前述のとおり玉造町立玉川小学校の西北部一帯の舌状や尾根状の台地先端部、及び縁辺に占地している。平成11年の遺跡分布調査では前方後円墳2基、円墳7基が確認され古墳群は、県道山田玉造線から井上神社に向かう道路の左右に散在し分布する。

各古墳の概要を述べると

- 1号墳 前方後円墳 坂の登り切った左側の宅地内に所在、全長約30m、高さ3.5m程のプランで円筒埴輪をもつ。約1/4弱が遺存する。埋葬施設は不明。
- 2号墳 円墳 1号墳の東側50mの畑地に所在、周辺削平、径1.5m、高さ2m前後のプランをもつ。埴輪、埋葬施設は不明。
- 3号墳 円墳 2号墳の東側に位置、民家入り口に雲母片岩板石による埋葬施設が遺存している。副葬品は不明。所謂変遷的古墳。
- 4号墳 円墳? 3号墳の北側に位置、報告書では墳丘形態は不明。測量図からは円墳の可能性大。円筒埴輪をもつ、埋葬施設は雲母片岩板石で原位置不明だが墳丘中心より外れる。直刀鈸は倒卵形、人骨は一体。(調査報告書)
- 5号墳 円墳 4号墳の東側に50mに位置、遺存状態から古墳の可能性が高い。報告書では断定はできずとある。遺物、埋葬施設は不明。(報告書)
- 6号墳 円墳 1号墳の北西側100mに位置、台地先端部に占地し径約20m、高さ2m前後、周溝が観察される。遺存状態は良い。
- 7号墳 1号墳の南東側の畑地に位置し形状、内容不明、
平成11年の分布調査で更に2基の古墳が確認された。位置的に本古墳群の範疇と理解しこれに含めた。通し番号で8、9号墳とした。
- 8号墳 前方後円墳 玉川小学校北側の台地上に位置、全長約4.5m、後円部高さ約4m、前方部幅2.2m前後、後円部は墓地に利用されている。埋葬施設、埴輪等不明。
- 9号墳 1号墳の南側、学校入り口の台地上に占地、一部校庭の為削平される。径2.5m、高さ3m前後で墳頂に凹あり。埋葬施設、埴輪等は不明。
以上が井上古墳群の最新の概要である。

古墳群周辺は縄文時代から生活環境に恵まれ井上貝塚、西の内貝塚等が所在、古代の寺『井上庵寺』がみられ史的環境に恵まれた地域である。1号墳の南には中世の人見館が位置する。

第2節 調査に至る経過

平成13年6月5日、田中治氏より所有地内に所在する井上古墳群第1号墳について、ほとんど崩されている状態で田中治氏の住宅の裏側に位置し、土砂崩れの恐れがあり、また将来的には住宅の増築を計画しているため、掘削する旨の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて(照会)が玉造町教育委員会へ提出された。それに伴い、玉造町教育委員会は、平成13年6月7日、玉造町遺跡調査会を通じて汀安衛氏に同席して頂き、現地踏査を実施した。その結果、古墳に散在する土師器片から6世紀前後の古墳であると推察されるが、本古墳の遺存率は2/5以下であり、埋葬施設が残存する可能性も少なく、現状で保存したとしても土砂崩れの危険が生じるため、県文化課との話し合いにより、記録保存が最善の方法であるという結論に達した。それにより、7月12日付けで古墳が所在する旨の回答を出し、踏査結果を田中治氏に報告し、協議をした結果、発掘調査を実施することになった。

1 調査日誌

- 7月24日 神官によりお祓いを行い、測量調査を開始、墳形が崩れている。円筒埴輪が散見される。暑い、酷暑が続く。
- 7月25日 残存部分の最も長い部分で土層図作成の準備(以前削平され相当の年月風雨にさらされ崩壊が進む)東西に設定する。土層から前方部は後世の盛土。
- 7月26日 前方部は盛土、墳丘を削平した土が西側に盛土されていたのが前方部と理解されていた。立ち木の根が1程下から張っている。土層作図後除去。
- 7月27日 土層図作成、盛土の下に黒褐色土が認められる。周堀の可能性が強い。
トレンチを設定し調査、浅く周溝が認められる。酷暑続く。円墳か。
- 7月30日 残存する僅かな墳頂部にはミツバの床が見られ、この部分を中心として東西に分けた。1区と4区とし2、3区部分はすでに消失し1区の大半も消失。
- 7月31日 平端部を平面的に下げる。遺物なし、50cm程の所に1m程の範囲に粘土塊が散見された。立ち木の大木の根が作業に支障をきたす。
- 8月 1日 墳頂部を平面的に下げる。変化なし。4区周溝部分の調査。浅いが幅は2~3mと広い。埴輪の細片が出土。二次投棄、廃棄か。猛暑続く。
- 8月 2日 埋葬施設存在の可能性はなくなり遺存部分にトレンチを2本設定し調査。土師器片がかなり出土した。4区周溝調査の結果、円墳と推定した。
- 8月 3日 トレンチ調査続行、土層図作成開始する。かなり大型の円墳の可能性が強くなる。断面からはかなり広い墳頂平端部をもつ古墳が想定された。
- 8月 4日 図面作成終了後、重機で遺存部分を除去、封土を10cm程残す。ジョレンで精査、住居跡4軒検出される。いずれも切り合ひ関係で消失していた。
- 8月 6日 住居跡の調査、西側4区に2軒、1区に2軒が認められた。いずれも南、北東が消失していた。4号は3号を1号は2号住居跡を掘り込む。
- 8月 7日 住居跡と古墳の実測図作成。写真撮影、遺物確認、道具を片づけて終了する。



第1図 古墳群の位置と地形

第3節 調査の概要

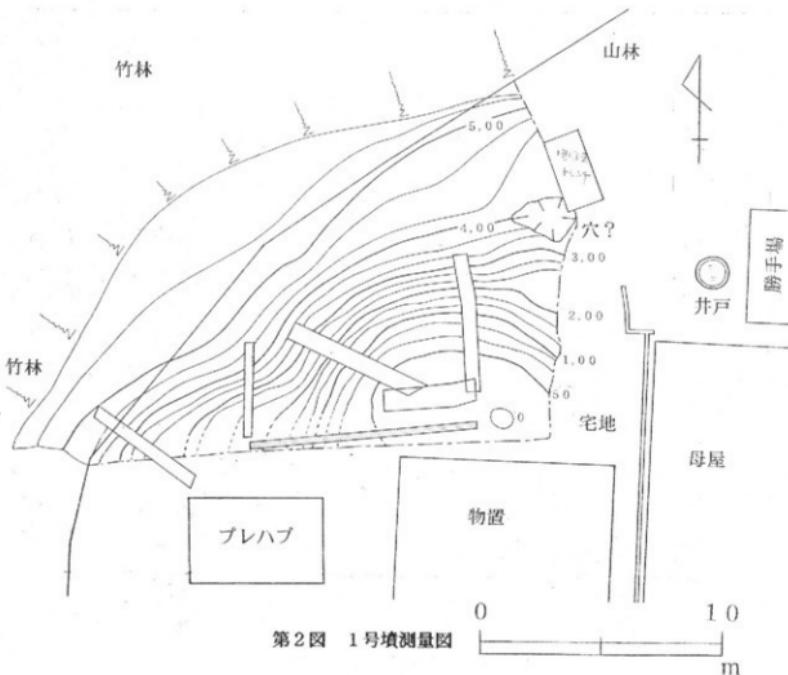
1 測量調査 (第2図)

測量は墳頂に0, 25を設定し25cmセンターで行なった。(墳頂は標高34, 25m) 搅乱が多く遺存部東側に0, 25cmは円形状に小さく巡るが農作業の搅乱土の可能性が強い。0, 50cmは半円状に見られ、これが本墳の形状と理解され以下かなり狭い間隔で-2mまで続く、ほぼ乱れのない半円状を呈し、以下-3mでは北側の一部と、西側の一部が外に流れる。東側は宅地の排水設備の搅乱、西側は削平土の捨場として盛り土された為に-4mまで変形し墳丘の形態の過ちを起す程変形していた。

境界付近の-5mのセンターは直線的に走行している。このラインは北西部のみ墳頂部からほぼ築造時に近い形態を維持していると思われるセンターであった。

測量時点では前方後円墳、もしくは前方後方墳すらも想定した。周堀の存在は北側では欠失、または存在しないと思われテラス状に平坦面の存在が窺われた。

東、南側は民家が連続して建てられている。その間は下端で1~2m前後と狭く測量の限りに於いては全体の1/3程度遺存していると推察した。そのため4分割し東側の一部を1区、西側を4区として調査を進めた。



2 トレンチの層序 (第3, 4, 5図)

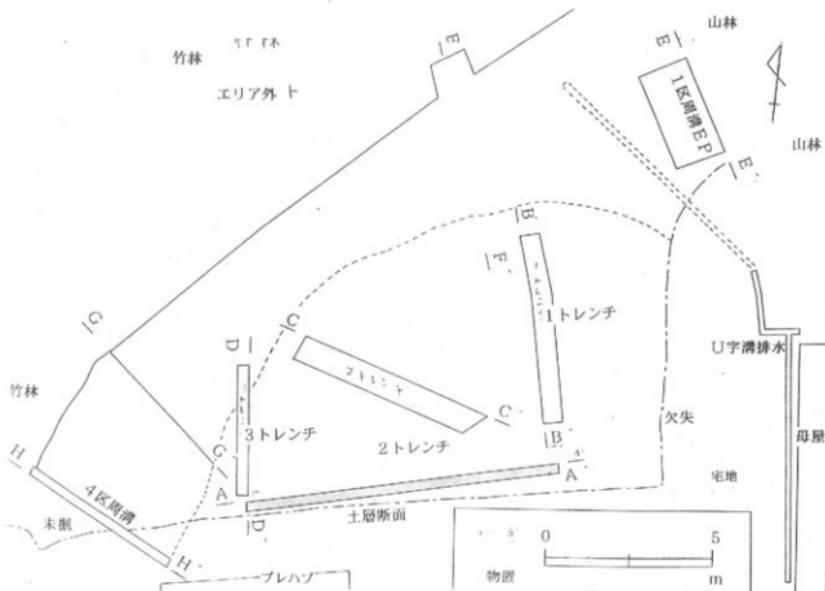
宅地側に設定したA-A'の土層図から見ると、前方部とした部分は明らかに封土の縫りや層序が乱れ後世の盛り土層であることが判明した。表土層は肩部から測量図のセンターでも明らかな様にかなりの急角度で周溝に至る。本部分では16層に分類した。

地山と住居跡覆土の上面に鈍い黒褐色土を薄く均した面に水平に積み上げている。裾と端部では薄く、またはブロック状に階段状に積み上げ2, 3, 9層で覆っている。16層下は住居跡の覆土層でこの時点では1軒の住居跡が推察された。

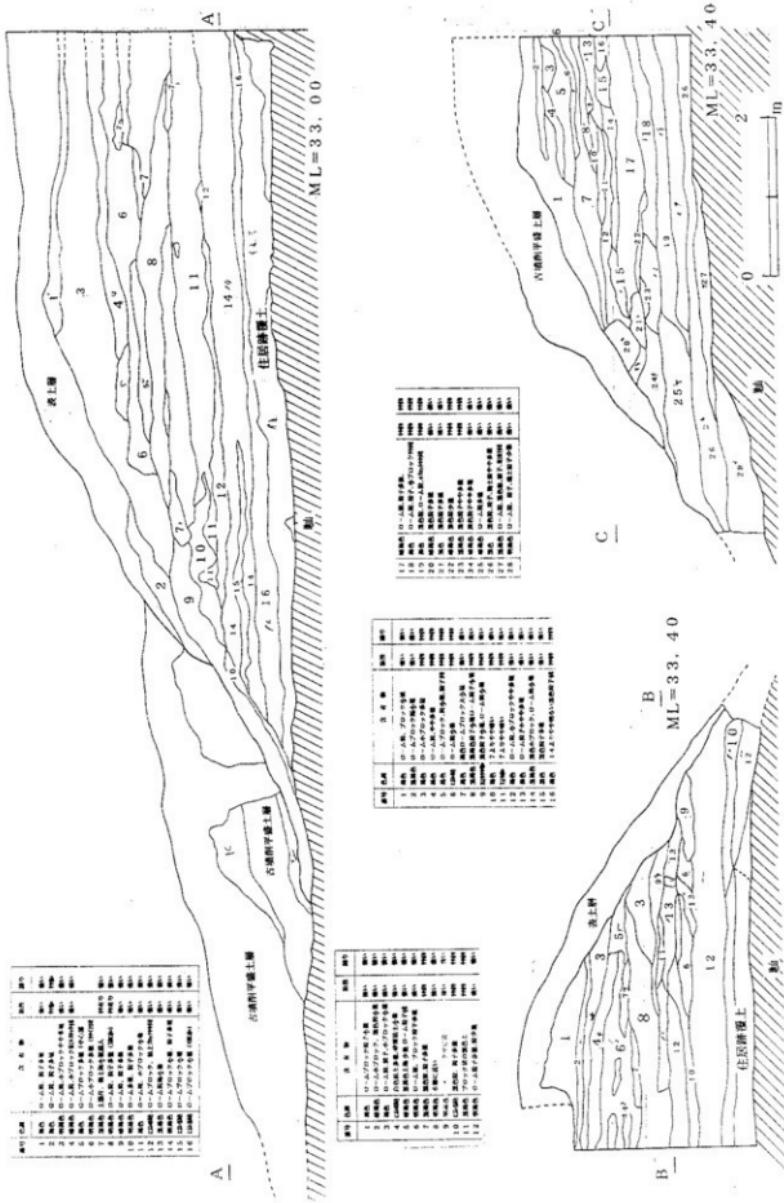
第1トレンチは南北に設定したもので13層に分類された。最下層はA-A'ラインと同様で鈍い黒褐色層から積み上げている。2, 3, 4, 8, 12, 10層はほぼ水平に重ねるがその他はブロック状に見られ南側とは対象的な積み方が見られた。外側では表土層と墳頂の搅乱土が重なり合っていた。

第2トレンチは第1トレンチの西側に設定した。遺存部の中間に位置するものの上部は農作業による搅乱があり不明。この部分の下部1mは水平な積み方が見られた。上部は20, 25層のクサビ状のブロックを境に薄い層が連続している。測量調査時点では最も遺存状態のいい部分であった。

築造方法は最初水平に1m程積み上げ、それから薄く重ねて中心に向かって弱く立ち上がる積み方が見られた。段状の感じで積み上げ、その上に薄く被せる。第2トレンチでは南側のA、またはBとは差異が見られる。これは、基盤の地山層の関係で細かく交互に積み上げていた。



第3図 1, 2, 3号トレンチ・周堀位置図



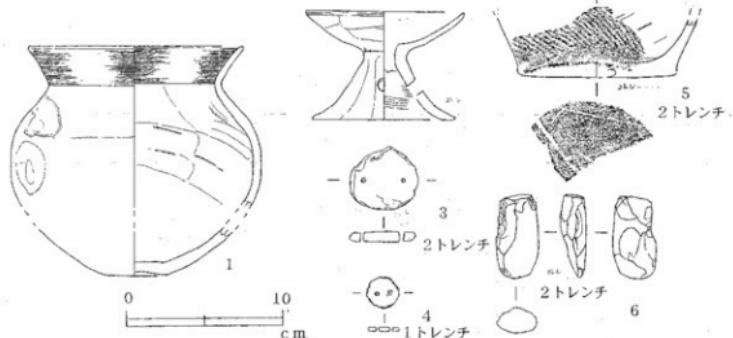
第4図 封土土層図

封土は、すべて周辺の土が用いられていた。特に住居跡の覆土、ローム、砂質粘土等が混在していた。そのためかなりの土師器と25片程の弥生式土器が出土した。地山からは2.80m程の盛土、封土が認められた。

遺物は小型甕が第2トレンチ27層から破片で出土、黒褐色層で住居跡の覆土の遺物が推察され1/3残存。2は上層からの出土で1/4が残存していた。坏部は器肉は薄い。底は穿孔され、浅い。器形は体部が緩やかに立ち上がり、口唇部は尖り気味。筒部中央に円形に3孔が見られる。脚裾部は直線的。器面はヘラケズリ、内面はナデ調整。3、4は双孔円盤の滑石製品。

5は弥生式土器底部で附加条縄文が施文され、底部には木葉痕が見られる。6は粗製の石器で一部欠失。

土師器甕、坏は器形から5世紀末～6初頭の所産である。



第5図 1, 2トレンチ出土遺物実測図

3 周堀 (第3, 6, 7図)

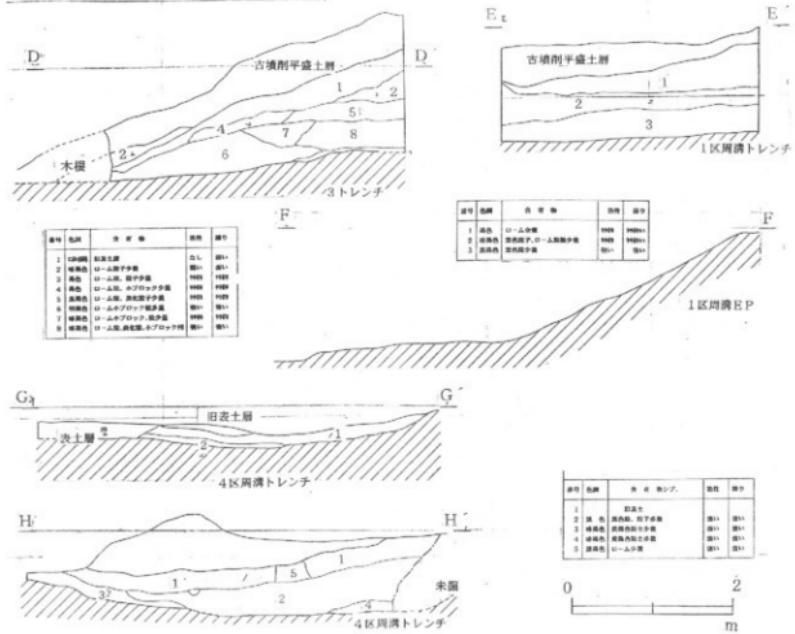
当初は前方後円墳と想定して調査を試みたが、土層断面から円墳の可能性が強まり西側北側、東側にトレンチを設定し古墳の規模、プランの確定を主眼に調査を進めた。

墳丘の遺存状態、遺存部、測量からは前述のとおり『前方後円墳』も否定できない為に北～西側の状態の比較的良好な部分を調査したところ上幅3mで20cm程の深い落ち込み「周堀」と推察される部分が確認された。これを左右に追うと左側は円形状にプレハブ建屋の下に入り、右側は台地縁にテラス状になる。

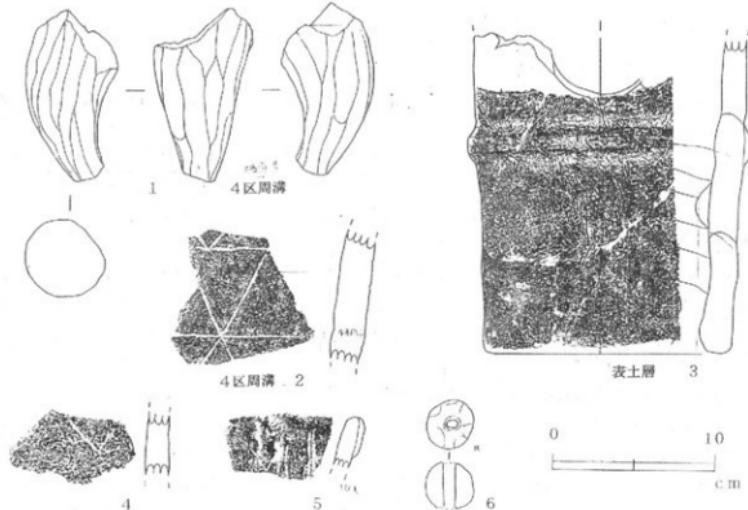
粘土層まで掘り込み、周堀底とし北側はテラス状に変化し北東側では上幅3m前後で、掘込みは確認部分で30cm前後と深い。底部はいずれも白色粘土質直上で止めている。これから東側では相当の周堀が観察されたと思われる。南側は家屋の下と庭で傾斜しているため北側同様な様相が推察させる。テラス状周堀が考えられる。

調査で確認された西側の周堀は、建屋の為幅は確定できないが推定で上幅約5m、底部幅2m、深さは50cm前後が推定される。墳丘側は鋭角的に地山をカットし周堀外に向かって緩やかに立ち上がる。端部で10cmの段差が認められた。

覆土、埋積土は5層に分けたが1、2、3、4層が埋積状況を暗示する。1層は旧表土層で、上部に盛り上された為に下位に位置している。ほぼ周堀の掘り込みプランで緩やかな傾斜を示す。



第6図 1区、4区周堀土層図



第7図 1区、4区周堀・出土遺物実測図

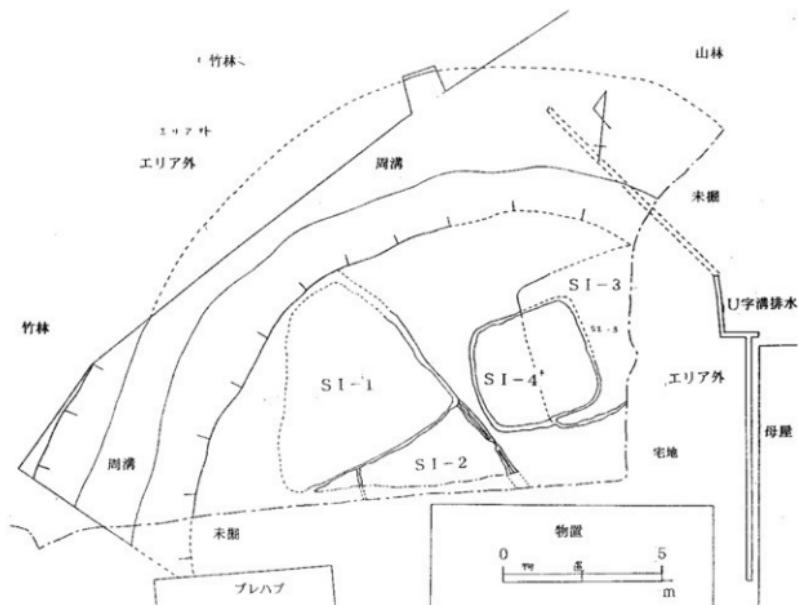
2層は色調からは厚いが遺物、埴輪の出土位置から2層に分類が可能である。破線部分から集中して埴輪小破片が出土している。この時期に何らかの事情があり埴輪が廃棄されたと推察される。(西側の周堀部分のみの観察結果)他の部分では浅く埋積は20cm以下でテラス部分でも小破片の検出があった。

北側端部でも小破片は認められたが西側の感じはない。

埴輪は小破片で器形を窺えるものは無い。1は形象埴輪 右手と思われるが指部分が欠失、肩部分から破損。手甲等はない。2、4は盾か。3は底径15cm程のやや大きめの円筒埴輪基部で一段目の凸帯と2段目の透孔が認められる。5は口縁部で薄く、弱く反る。凸帯は扁平で幅は狭い。透孔部の形状は不明、破片からは円形が推察される。器面には刷毛目調整がなされている。埴輪は赤褐色、黄褐色系の色調の違いが見られた。総じて赤褐色系のものが出土量の7割占める。形態、凸帯等にはさほどの差は見られない。焼成、胎土に若干の差が見られた。総じて赤褐色系の埴輪は焼成は悪く、胎土が粗雑であった。6は土製の丸玉である。

第4節 墳丘下の遺構

墳丘下から4軒の住居跡が検出された。各住居跡とも削平、複合等で全容を把握出来る遺構はない。以下住居跡の概要について述べる。



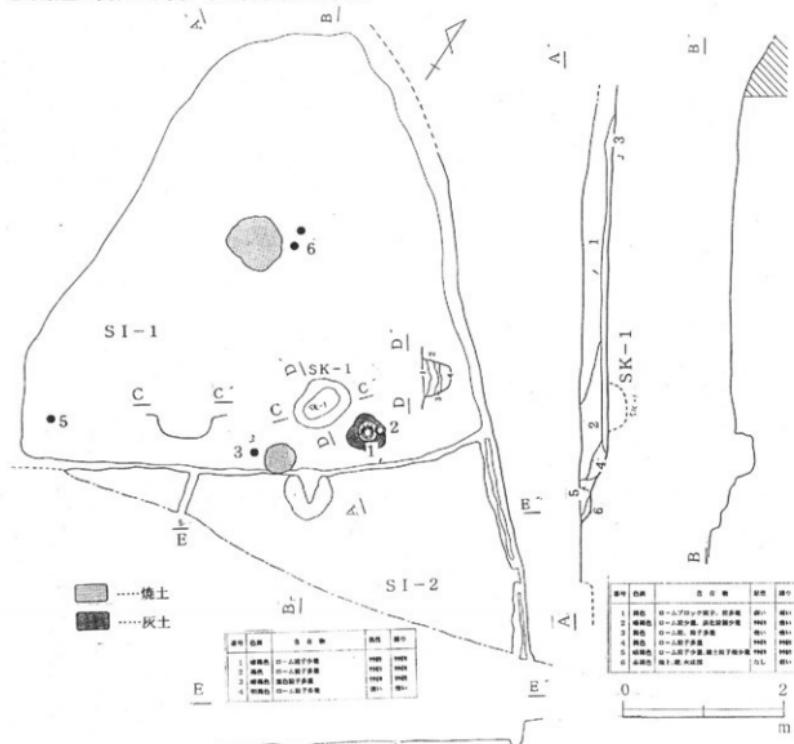
第8図 古墳・住居跡位置図

1号住居跡（第9、10図）

本遺構は、遺存していた墳丘北側に位置し、検出された2号住居跡の北側を掘り込み検出された。北側部分は周囲のため欠失し約1/2程の割合と考えられる。主軸をNWに置くと考えられ規模は東西5m、南北5m程が推察され、プランは隅丸方形を呈すると考えられる。床面の縁りは南東隅部近くで見られる。他はローム剥出しの感じであった。上面に焼土が2ヶ所、灰塊が1ヶ所それぞれ床面より浮いて検出された。

遺物は10図1、2が床面から出土している他は覆土中である。1の壺は最大径を胴部下位に置き、頸部に向かって弱く括れる。短い口縁部は外反し口唇部は開き薄い。器高21cm、最大径23.5cm、口径16cmを測る。ほぼ完形で口縁部に薄く赤彩が見られる。調整は口縁部ナデ、胴部は粗いヘラケズリがみられ器肉は薄い。

2は、口径13.3cm、高さ5cm程の壺で口縁部の一部を欠失するがほぼ完形に近い。体部は半円形状でややつぶれた感じ、口縁部は弱く括れた部分から強く外反、口唇部は水平に近い。口縁部は横ナデ、体部はナデと粗いヘラケズリ内面の口縁部に薄く赤彩がほどこされる。壺、壺とも胎土に長石、石英、砂を含み胎土は粗い。

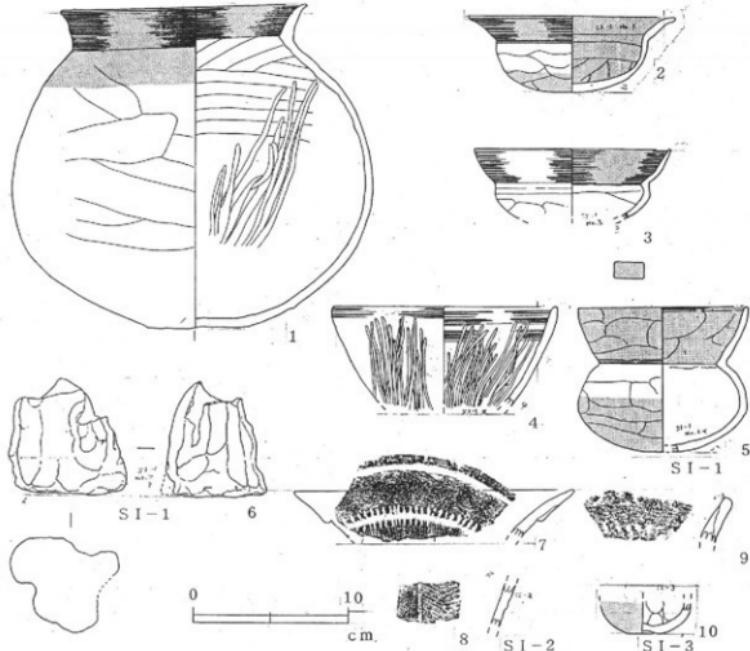


第9図 第1号・2号住居跡実測図

3は、口縁部が弱く外反し体部はややつぶれた半球形状で2に近いか。1／5残。胎土も整形もほぼ同様。全体に薄く赤彩が施される。4は壺形土器の一部で口縁部のみ。全体には外反するがゆるく内傾気味、小量の石英を含み焼成はよい。内外とも細かなヘラ磨き。5は、3を膨らましたような感じの壺形土器で、口縁部は全体に外反するがゆるく内傾気味。胴部はややつぶれた円形状で口径、胴部最大径がほぼ同値。胎土は2、3の坏と同様で粗い。外、内側の口縁部に赤彩が見られる。2／5程遺存。

6は、床面より5cm程浮いて出土した炉支脚と思われる土製品。

本住居跡は出土遺物の特徴から5世紀後半が推察出来る。



第10図 第1号・2号・3号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡（第9、10図）

本造構は、1号住居跡の南側に位置し北側は1号住居跡に埋り込まれ、南側は宅地造成のため削平され欠失、三角形状に遺存していた。床面の締りは良く、中央部北側に炉跡の一部が検出され、小炭化材も小量みられた。東側には幅の狭い周溝も認められた。壁面立ち上がりは25cmを測る。主軸は1号住居跡同様N-43°-W前後である。

炉跡は径60cm程の楕円形状と思われ、覆土は暗褐色の中に小量の焼土を含む。6層赤褐色の焼土で炉跡の一部である。

7, 8は2号住居跡出土の弥生式土器で複合口縁部の7は複合下端に細かな刻み目を施す。胎土には石英を含む。焼成は良く淡い赤褐色を呈する。8は縦位のスリットの間に細密沈線状に施文、胎土に石英を含む。覆土中の出土で遺物は少なく总数20片である。出土遺物等から弥生期末の遺構である。プラン、規模は不明。

3号住居跡 (第10図、11図)

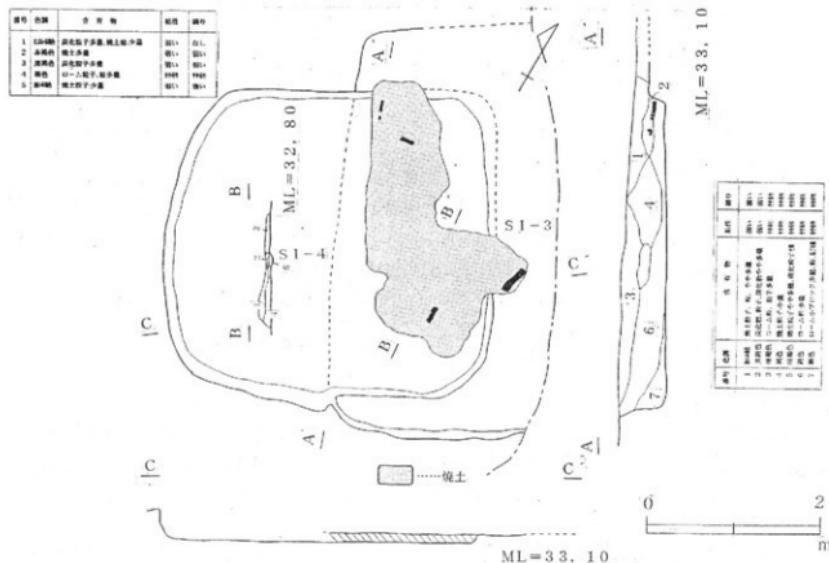
本遺構は2号住居跡の東側20cmに近接し4号住居跡の一部を掘り込み検出された。主軸をN-60°-Wに置き辺4, 5m程の隅丸方形形状プランが考えられる。東側は、宅地造成時に削平されおよそ2/5弱前後が遺存していた。床面の締りは弱く多量の焼土、4本程の炭化材が検出された。壁面の立ち上がりは直立気味で南側で5.5cm程の高さを測る。覆土は自然埋積の上に一部投げ込み状の層が見ら上面に、焼土が検出状態された。層序からは、一部埋積の後に焼却されたと考えられる。

遺物は図示した9, 10と細片が20片程検出された。9は複合口縁部で口唇部に波状の突起が見られ、三ヶ所の刻みが入る。器面、胎土は粗雑で石英、砂の混入が多い。10は小形壺の底部と思われるもので胎土、焼成は良い。外面は赤彩が施されている。覆土6層から出土している。

遺物は弥生式土器の小破片が見られたが、土師器も少量出土し図示した。

時期は10の小型壺の時代、5世紀末が推察されよう。

4号住居跡 (第11図)



第11図 第3・4号住居跡実測図

本遺構は、3号住居跡の下部に1/2程が位置する。主軸をN-30°-Wに置き辺3.5m前後の隅丸方形プランを呈する。掘り込みは炉跡、柱穴は不明であった。

遺物は床面から弥生式土器の小破片が3片程検出された。遺構プラン、遺物からは弥生期の遺構と推察される。

2 その他の遺物 (第12図)

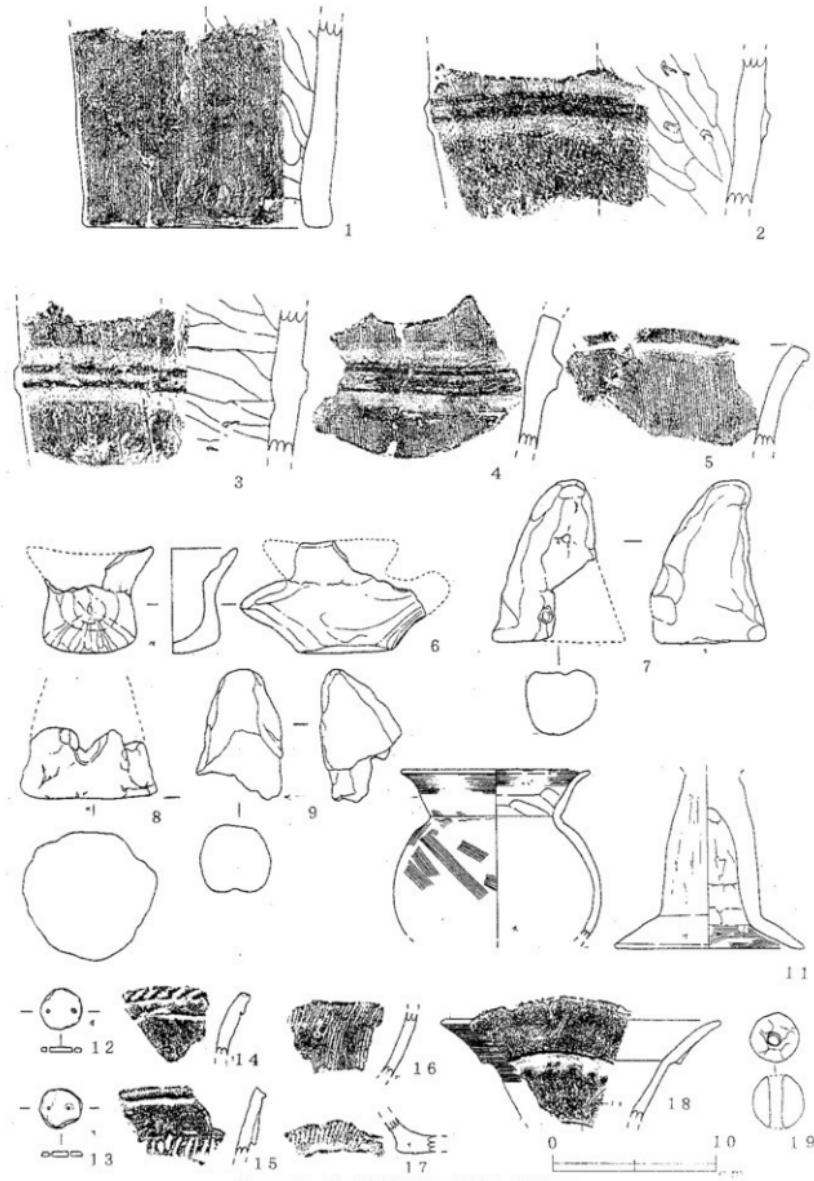
本調査において古墳封土中、表土層、南側削平部分、西側の盛土などから埴輪、土師器、弥生式土器等が出土、採集された。以下、これらについて述べる。

1～5は円筒埴輪で1は基底部、2は、凸帯をもつ2段目か、径が大きい。3はやや退化気味の凸帯をもつ、径、開き具合から2段目か。4は凸帯と透孔が見られる。凸帯は台形状に近く本古墳出土埴輪ではさも突出する。5は口縁部で外反する。3、4、5は赤褐色系で1、2は黄褐色系の色調を示す。器面の調整は刷毛が用いられている。黄褐色系の刷毛目は不鮮明であるが赤褐色系では狭く、細く緻密になされている。器肉は共に1cm前後で差は見られない。

6は水鳥と思われる土製品で削平された南側の断面、封土から出土している。はばたきの形態をもつ、欠失し全容は不明。7、8、9は粘土を固めた炉支脚で欠失の為全容は不明、大小があると思われる。1号住居跡出土のものはやや小型であった。

10は小型の壺で頸部はくの字形状で口唇部は外反、水平に近い。器肉は薄く調整は粗雑で長石を含む。器面は7本単位の刷毛目調整が見られる。口縁部はナデ調整。11は高杯で脚部は筒状で長く、裾部はラッパ状に開く。ナデ、ヘラナデ調整がなされている。

12、13は滑石製の双孔円盤の梢円径で径2.5cm前後を計る。14～18は弥生式土器で複合口縁をもつ14、15がある。14は口唇部に斜めに刻みを、15は複合部下端に刻み目文を施文している。3号住居跡出土土器の口縁部と類似する。14の胎土は精選され15は砂、長石を含み焼成、胎土はやや悪い。共にナデ調整。16は胴部破片で付加状2種を施文、17は底部で単節繩文が施文されている。18は複合口縁の土師器で口縁部は強く外反、底部穿孔の壺形態も想定される部分である。焼成は良く器面はナデ調整されている。



第12図 井上古墳群第1号墳表探査実測図

第5節 総括

調査によって得られた結果を箇条書にし結びに替える。

本古墳は測量調査によって得られた図面から判断して残存していた墳丘、古墳は全体の1／3と推定され、測量調査の結果では『前方後円墳』は否定出来なかった。それ程盛土は良く出来ていた。

築造過程、方法の確認のため南側の削平部分を垂直にカットし観察した結果、明らかに前方部は最近の盛り土であることが判明した。それは50年生程の椎の木根が、旧表土のした1m程に3本検出され1本は腐敗していた。盛り土には層序が確認出来なかった。

旧表土との間に明確な締り、色調、土質等の差が認められた。旧表土の下に黒褐色土層が認められ周堀の存在が確実になった。

周堀の調査で円形を呈する事がほぼ確定した。(調査範囲の2／3前後であるが)

推定出来る古墳の規模は直径30m、高さは北側周堀底部から5.5m、周堀上幅は3m前後、周底幅1~2m、深さ10~70cm、封土部分は径20m程で、南側の削平部分の地山からの高さ2.8mを測る大型の円墳が想定された。

墳丘も保存の良い西北の測量センター、封土断面を見ると本古墳は、周底上端から5.5m程で墳頂平坦部に移行し、コンタ間隔是非常に狭い。

これから復元出来る『古墳』の姿は墳頂部に径9m程の平坦部をもつ6世紀初頭の『特異』な古墳の姿が浮かび上がる。

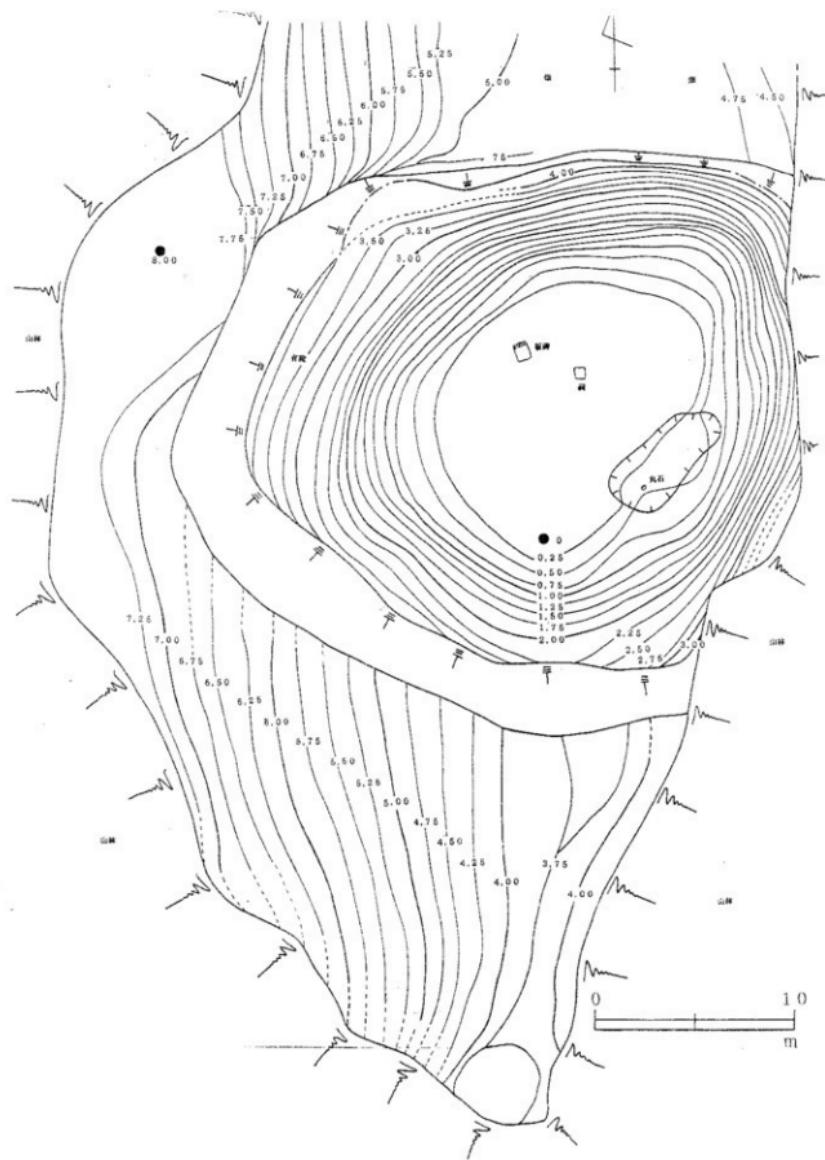
古墳の埋葬施設は雲母片岩による『箱式石棺』と言われているが仔細は不詳である。

出土した埴輪は円筒埴輪、形象埴輪が認められた。円筒埴輪の凸帯は台形状でつぶれた感じである。凸帯部は台形状を呈する。4号墳の埴輪実測図が無いために写真から比較すると円形の透孔をもち凸帯は台形状で相似する。段の直径は高さと同値を示す。2条3段が推察される。4号墳の埋葬施設は雲母片岩板石の箱式石棺で中心部からやや外れた位置と報告されている。墳形は不明。

古墳の下部からは住居跡が4軒検出された。弥生時代後期の住居跡が3軒、古墳時代和泉期の住居跡1軒が検出された。これらから本古墳の築造時期は出土土器の特徴から6世紀初頭と考える。

以上が調査によって得られた井上1号墳の概要である。

参考文献 『井上古墳群 第4号墳発掘調査報告書』 1986 玉造町教育委員会
『玉造史叢第38号』『玉造町の遺跡分布調査を行なって』 1998 汀 安衛



第13図 岡部古墳群第1号墳測量調査

第6節 考察

井上古墳群第1号墳（以下井上古墳）を宅地の拡張、家屋の新築のため調査した。報文のとおり「古墳」の遺存状態が悪く、家屋のため周囲等の全掘や確認ができなかった。よって古墳のプラン、規模、占地等相似する岡部古墳群第1号墳（以下岡部古墳）の測量調査を実施し、井上古墳の規模、プラン、性格等について検討の資料としたかった。しかし、測量調査の結果は予想に反した。

井上古墳は推定30mの大型の円墳で、測量調査からは墳頂に相当の平坦面を有すると推察され、占地的には馬の背状の狭窄部分に位置し、北側には狭いテラス状の周囲をもち2段の凸型をもつ円筒埴輪が確認され、2系統の埴輪がある。

岡部古墳も地形、プラン、規模等に類似性が見られた。測量の結果、径約32m、高さ4m前後であることが推察された。墳頂部には長径14m程の平坦面が認められ、相対的にはかなり地形に制約されたと思われ、やや変則的のプランで一見しては前方後方墳の可能性すら感じられた。

（短径12m）測量調査は25cmで行った。その結果、作図は仔細な部分も捉えられたと考える。測量図（第13図）から概観すれば西側は2.75m前後まではほぼ等間隔で巡り、以下はゆるく傾斜で有段の可能性も見られ、3.50mでカットされ不明。南側もほぼ同様で、西側と同じように直線的なラインが巡る。

東側は下部の畠地のためかなりカットされたと思われ、3mセンターが途切れ垂直的に5m程下がる。やや曲線に近い感じであるが円墳と仮定すれば直接的である。

北側では2mまで膨らみ張り出す。この部分から全体的に概観すると「前方後方墳の前方部」と捉えられ、下部2m以下は畠で削平され、旧態を推察する事は不可能であった。伝承、地主の談話でも明確に捉えられないが、畠地部分に地形の弱い膨らみが存在する。平坦面には祠、板碑、丸石等が散在している。東側の丸石部分に掘り込みが認められた。以上の諸点から井上古墳との比較検討は墳形、時期から無理があると判断した。

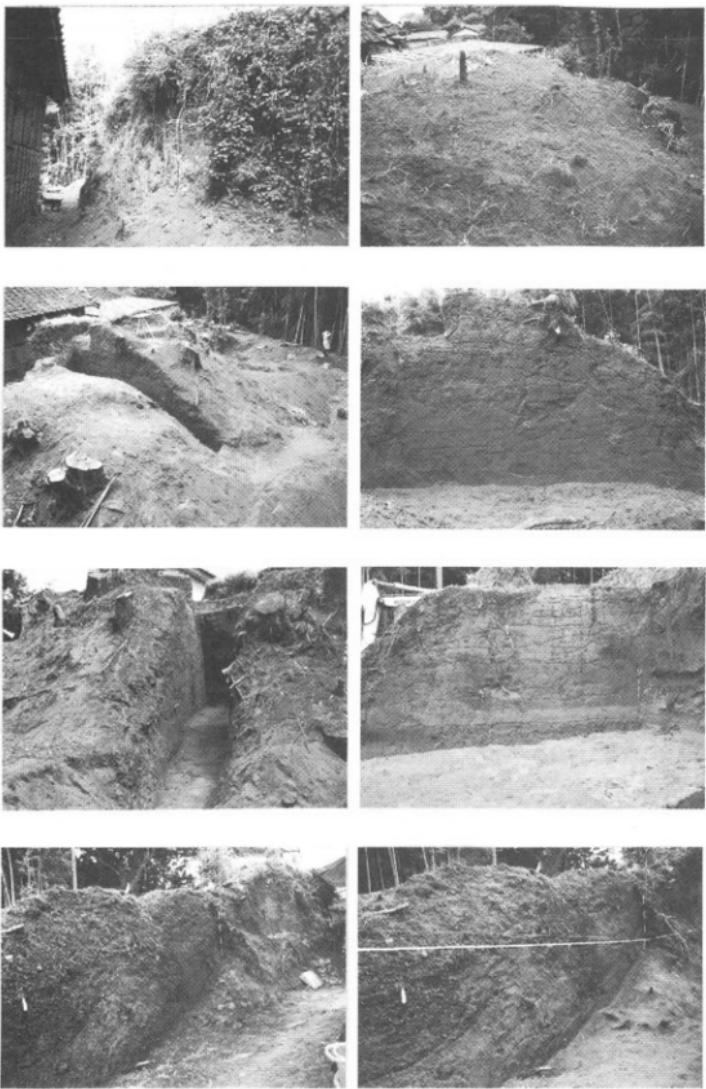
井上古墳は、当初から前方後方墳との見解で遺跡台帳に登録し、測量調査においても「前方後方墳」として捉えていた。しかし、封土、周囲の土層断面図から円墳と断定した。これらから比較検討の余地は少なく、測量結果は生かせなかったが、より先行する『古墳』の可能性は否定できない。

周辺の古墳の踏査から類似する古墳は浜地区の三枚塚古墳群がプラン、規模等から相似的であり、本古墳は沖積地に占地する大型の円墳で、台地上の人形塚古墳と形態的に類似的であるが、埴輪等は観察されない。（注1）

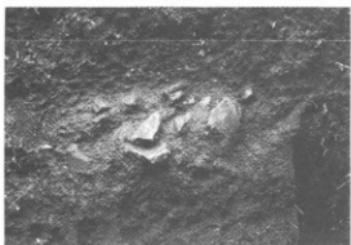
玉造町の一部に認められる径30m前後の『大型の円墳』は墳頂に広い平坦面を有し、時期、プラン等特異な古墳がみられ、その性格は今後の研究に待つかはないが、本地域にそのような集団が存在したのか、余地があったのか、『井上古墳』のもつ意味は深く、同様の古墳は、井上、藤井、手賀にそれぞれ1基、浜に2基が認められるがあくまでも踏査所見であることを断り結びに替えた。

（文責 江 安衛）

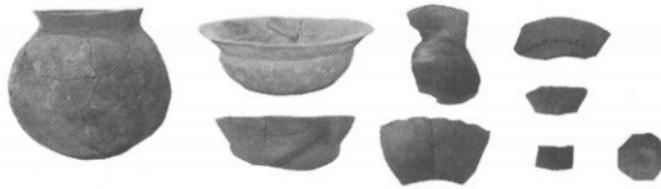
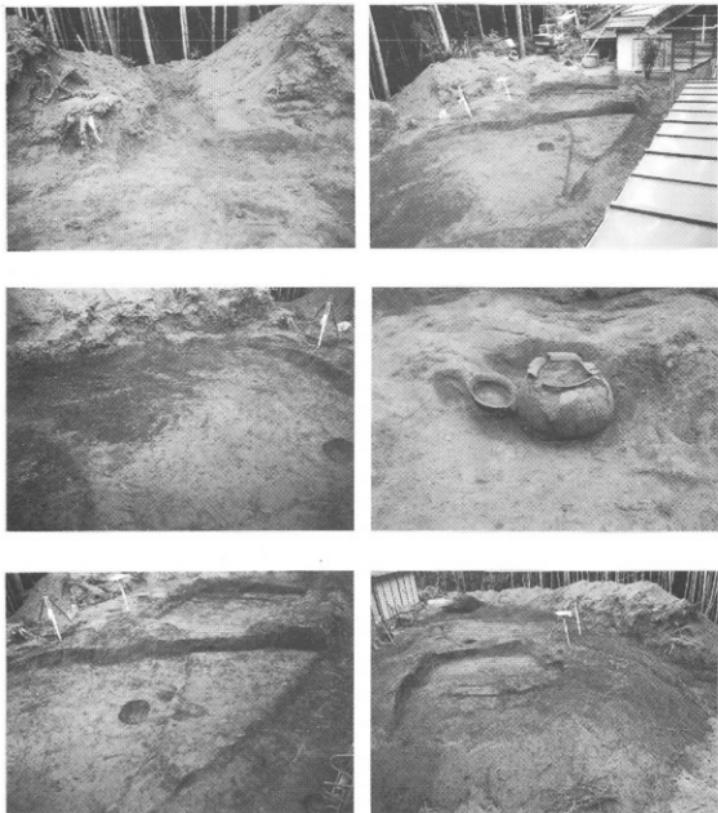
注1 「玉造町の遺跡分布調査を行って」『史叢第38号』 1997 江 安衛



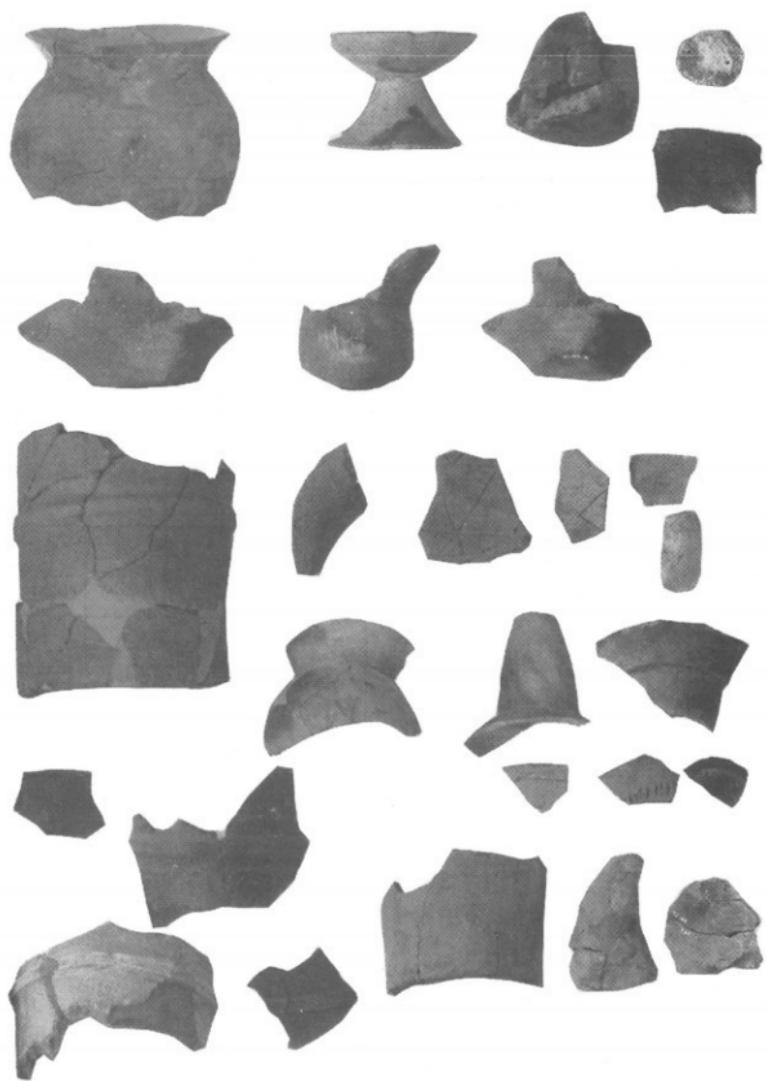
P I - 1 上左右 調査前状態、中左右 トレンチと土層、中下左右 トレンチと土層下左右
前方部とされていた部分の盛土、下部に木根が見える。



PL-2 上左右 周堀土層と遺物の列、中左右北西側のテラス状に近い周堀
中左 西側からみる周堀、右 東側からの全景、下左右 北側の周堀テラス



PL-3 上左 北側のテラス部分、右 西側からの全景、中上左 1号住居跡、右遺物
 中下左 1、2号住居跡、中下右 3、4号住居跡
 下段1、2、3号住居跡出土土器



PL-4 トレンチ出土遺物、土器、水鳥形土器、円筒埴輪、炉支脚

抄 錄

フリガナ	イノウエコフングンダイ1ゴウフンハックツチョウサホウコクショ							
書名	井上古墳群第1号墳発掘調査報告書							
発行者名	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会							
所在地	〒311-3511 茨城県行方郡玉造町乙1179 中央公民館内							
編集者名	汀 安衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所在地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚718-3							
発行年月日	2002年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
井上古墳群 第1号墳	茨城県行方郡玉造町 大字井上2053-1ほか	08425	056-001	36° 3' 44"	140° 26' 16"	2001.7.24 2001.8.7	629 m ²	宅地拡張造成及 び土砂崩れの危 険回避
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
井上古墳群 第1号墳	古墳	古墳	円墳(墳丘・周堀) 住居跡 (弥生～古墳時代)	円筒埴輪、鳥状土製品、人物埴輪腕 土師器 弥生式土器				

井上古墳群第1号墳

発掘調査報告書

印刷 2002年2月28日

発行 2002年2月28日

編集 鹿行文化研究所

発行 玉造町遺跡調査会

玉造町教育委員会

印刷所 (株) さんゆう社印刷